

## GMOフリーゾーンについて

### GMOフリーゾーン運動のはじまり

今や世界中に広がっている「GMOフリーゾーン（遺伝子組み換え作物を拒否する地域）」は、スローフード発祥の地として有名なイタリア・トスカーナ地方のワイン農家によって1999年に始まりました。その後、2002年に環境団体「地球の友」がイギリスでキャンペーンを立ち上げたのをきっかけにヨーロッパだけでなく、北米やアジア、オセアニア地域にも広がっています。

欧州のGMOフリーゾーン宣言は、イタリアで全土の8割、フランスで1250を超える自治体、オーストリアやポーランドで全州政府、ギリシャで地方政府すべてが行うなど、拡大の一途をたどっており、2003年以来、ほぼ1年に1回、GMOフリーゾーン欧州会議を開いています。

### 日本のGMOフリーゾーン運動

日本でGMOフリーゾーン運動が本格的に始まったのは2005年。農薬空中散布に反対し、環境に配慮したコメ作りを行っていた滋賀県高島市の農家が同年1月、圃場に畳3畳大の看板を立て、GMOフリーゾーン宣言をしました。翌2006年3月に第1回GMOフリーゾーン全国交流集会を高島市で開催した後、1年に1度のペースで交流集会を開き、運動の拡大をはかっています。

第1回集会時に4,700ヘクタールだったGMOフリーゾーン宣言面積は2020年に10万ヘクタールを突破しました。自治体による宣言が主体の欧米と異なり、日本のGMOフリーゾーン宣言は農家や消費者が個々に行っているため、面積拡大のスピードは決して速くありませんが、個人による理解で進められる草の根運動の意義は大きいといえるでしょう。ゲノム編集作物・魚類などが出てきた今、ゲノム編集も含めた遺伝子操作に反対する運動として、ますます意義が大きくなっています。

遺伝子組み換え作物は植えない、売らない、買わないことを宣言するGMOフリーゾーン運動は、自然と共生しながら多様な種や農法によって農業を営み、自然と共生する人間の暮らしを守る運動です。それは、いのちを守り育む人たちの連帯運動と言い換えることもできます。

先祖から受け継いだ暮らしと自然を守り、それを子どもたちの未来に引き継ぐ者としての責任を果たそうとするGMOフリーゾーン運動は今後ますます重要になってきます。



## GMOフリーゾーンを広げよう 「キャンペーンニュース243号より抜粋」

GMOフリーゾーン運動は、1999年にイタリアで始まりました。日本でも2005年に滋賀県でスタート集会が開催され、来年春開催の東京大会が20回目になります。GMOフリーゾーン運動は、GMOのない地域を拡大していく運動です。今、日本では遺伝子組み換え作物は栽培されていませんが、それはこの運動の成果といえます。しかし、ゲノム編集トマトの栽培が行われ、ゲノム編集魚の養殖も始まりました。大量の遺伝子を意図せず改変する恐れがあるゲノム編集は、遺伝子組み換え以上に安全性と生態系への影響が懸念されます。このゲノム編集食品ですが、売り込む側はさまざまな売り込みを図ってきました。トマトでは、製造・販売企業により福祉施設や小学校への苗の無償配布がもくろまれましたが、各地域の人たちが地元自治体に「受け取らないで」という働きかけを行ったことで、受け取った自治体がゼロという実績を上げることができました。ゲノム編集魚では、養殖場のあった京都府宮津市がふるさと納税返礼品に登録しましたが、地元の人たちを中心に運動が全国化して、結局、開発・養殖・販売を行っている企業が、同市から撤退し、ふるさと納税返礼品も中止されました。それにしてもゲノム編集食品の開発先進国になってしまった日本でのGMOフリーゾーン拡大の取り組みは世界から注目されています。

来年3月に開催する大会で、全国交流集会は20回目を迎えます。それを記念して国際大会として開催します。ゲノム編集食品がこれ以上広がる前に、ゲノム編集食品の問題点を多くの人に知らせ、食べものの遺伝子操作を許さない取り組みを拡大しましょう。生産者と消費者、その間をつなぐ事業者等が連帯して、GMOフリーの輪を広げ、宣言を拡大していきましょう。

(※GMOは遺伝子を操作した生物のことです。ここでは遺伝子組み換え及びゲノム編集を含む遺伝子操作生物を用いた食べ物を対象とします。)